

箱館戦争と弘前藩

櫻庭秀俊

(一)

旧幕海軍副総裁榎本釜次郎（武揚）は明治元年八月十九日新政府に引渡すべき幕府艦船八艘（開陽・回天・蟠竜・神速・千代田・長鯨・咸臨・美嘉保）を率いて品川沖を脱走したことが、ひいては箱館戦争の導因となった。

脱走の際、榎本は蝦夷地を開拓して徳川旧臣を救済したい旨の嘆願書を政府に提出する一方では、奥羽越列藩同盟軍に加担する目的もあり、この脱走は新政府より朝敵行為とみなされたのである。途中銚子沖で暴風雨にあい四散し、咸臨・美嘉保の二艘を失ない、三々五々相前後しながら九月二十六日仙台領寒風沢に全艦集結したものの、奥羽の戦況は敗色すでに歴然としていた。かくて損傷せる艦船を修繕した後、榎本は仙台に群がり集まっていた大島圭介・土方歳三等敗残兵を乗せ、総勢二千七百余名が十月十日仙台沖を出帆、十三日南部領宮古湾に寄港し各船薪を積入れた後十八日同港出帆、榎本軍は箱館府の意表をついて、箱館の北方内浦湾鷺ノ木に上陸し、箱館に向かって南下を開始した。これに対し、弘前・福山・大野・松前の藩兵が迎え討つことになるがもろくも敗れている。因みに箱館警備の弱体化は、弘前藩・盛岡藩の敵対関係にも一因がある。すなわち、去る八月に弘前藩・盛岡藩の対立激化に伴って、両藩の箱

館警衛兵の撤退帰藩という事件が起きていることである。(1) このこともあって箱館警衛は充分な備えがあるはずもなく、榎本軍は十月二十五日には五稜郭を占領し次いで箱館に入った。

松前藩はその後も抵抗を続けたが、福山・館・江差と相次いで陥落させ、榎本軍は上陸から一カ月足らずで蝦夷全島を掌中に収めるに至っている。十二月十四日全島平定を箱館在留の各国領事に通告し、次いで士官以上の公選によって諸役を選挙した。榎本は総裁、松平太郎は副総裁、その他海軍奉行荒井郁之助、陸軍奉行大島圭介、同並土方歳三、箱館奉行永井玄蕃、会計奉行榎本対馬、また、沢太郎左衛門を開拓奉行となし室蘭に二百余人を移住させている。更に弘前藩の旧陣屋である千代ヶ台の総督に中島三郎助を選出したという。なお、その他特記すべきは、デリュネラ仏人十名が軍事・外交の顧問として、軍事教練・陣地構築の指導、作戦計画の立案などに参与していることである。(2)

英仏二国からは事実上の独立政権として承認され、アダムスの『日本史』には明治二年一月二十七日共和国宣言の式典を行なった旨の記述がある。このような事態に直面した新政府は榎本軍の鎮圧に着手したものの、その達成に七ヶ月の期間を要している。それは、九月二十二日の会津藩の降伏によって東北戊辰戦役が終りを告げた

ばかりで、その処理にあたらねばならなかったこと、また、時期的に榎本軍の蝦夷地占領は積雪厳寒に向おうとしていたので、翌春を期して総攻撃をかけた方が得策であったこと、また、榎本軍の艦隊が精鋭強大であり、一方新政府軍は対抗できる艦船がなく、制海権を榎本軍に握ぎられていたこと、従って、青森口には多数の各藩兵が滞陣していたにもかかわらず渡航できなかったし、たとえ上陸作戦を敢行しても糧食その他の補給が甚だ困難であった。更には地理的に榎本軍の行為は新政府にとって直接緊急な脅威とならなかったこと等が指摘されよう。しかし、明治二年四月九日、青森に集結した新政府軍は艦船の来航により圧倒的な物量をもって総攻撃を開始し、江差・松前を復し次いで箱館を陥落させ、一カ月余の五月十七日、榎本は五稜郭で降伏することになる。かくて鳥羽・伏見の戦いに始まる維新戦争は一年半にして漸く終結することになる。

さて、箱館戦争直前の弘前藩の情勢の詳細は省略するが、一旦加担した奥羽越列藩同盟を脱退後は、勤王の実効を立てることを要求される羽目となり、秋田藩と共に庄内藩・盛岡藩と武力衝突を繰り返したものの、軍事的には得るところ少なく、逆に多大の犠牲を払っている。しかるに息つく暇もなく箱館戦争となり、これに対する弘前藩の態度は次の一節に要約できよう。

「我藩嚮キニ一度勤王ノ方向ヲ誤リ、王師ニ抗スルノ途ニ入ラントス、幸ニ宗家近衛家ノ教旨ヲ奉ジ、讎テ国論ヲ一定シ東奔西走、兵ヲ各地ニ出シ、時ニ難戦苦闘ヲ試ルト雖モ兵備未ダ完カラズ、操練未ダ熟セズ、地理亦諳ゼザル處アルヲ以テ、到ル所名譽尚博スルニ足ラザルハ一藩拳テ遺憾トスル所ナリ、然ルニ今日松前地ニ一大事變ノ起ルアリ、該地ハ則チ従前我藩ノ任ジ

テ守衛セシ所ナレバ、此役ニ於テハ弊藩先驅力ヲ尽シテ、報ズル所アラントス、他日官軍大ニ到リ、軍資糧食ヲ要スルコトアルニ至ラバ、国力ヲ拏ゲテ其求に応ゼントス」(『津輕承昭公伝』六六ページ)

とまれ、榎本軍討伐の最前進基地となった弘前藩は、軍事基地としても補給基地としても重要な役割を担うことになる。

本稿は箱館戦争それ自体に関する研究論文は一部詳にされていない個所もあるが、ほとんど出尽した観があるので、先学の驥尾に附して箱館戦争に弘前藩がどのように対応していたか、その足跡を少しく考察し、弘前藩にとってどのような意義をもち、影響をうけることになったのかを論述してみたいと思う。

注(1)拙稿「野辺地戦争について」(弘前大学国史研究 第55・57号所収)

(2)ブリュネらは榎本の行動に好意をもち協力を惜しまなかったよう、榎本の書翰にもその点について触れた個所がある。

「フランス国王宮七名も一同の義気に感じ死生をとみにいたし昼夜尽力いたし呉候事忝仕合ニ御座候」(明治二年一月二十日付母・姉・妻あて書翰)

また、仏人の具体的な行動については大鳥圭介著『幕末実戦史』に散見する。

(3)十月二日大村益次郎より堀真五郎宛の書面中に「早々軍艦差向ケ度候得共何分開陽丸に敵するの船なく如何ともするなき事に候、遷延今日に立至候」といい、脱艦撃滅の期を来年二月に置いている。(『北海道史要』)

(二)

明治元年十月十八日、箱館府知事清水谷公考より急使があり、幕府脱艦の賊箱館に来襲につき、弘前藩に出兵応援の要請があった。

弘前藩では直ちに野辺地戦争後、小湊に滞陣していた大隊長木村繁四郎（後に李之助と改名）に四小隊（原子勘吾・手塚群平・石郷岡廉之助・笹権六郎の各隊）を率いさせ、同夜のうちに箱館に進発させている。弘前藩としては、幕府脱艦の蝦夷地襲来を予期し、蝦夷地警備の任にあった同藩が先に盛岡藩に備えて警備兵を撤退させたこともからんで、奥羽鎮撫総督に対して野辺地戦争後の兵力を箱館警備に転陣させるよう申牒していた模様で、その為箱館府知事の要請にも間を入れず対処することができた。但し、木村隊の進発は青森口に居た大道寺・山中両家老の判断によるもので、弘前へは急使を以て報告している。

「就而御国ニ而勤王ノ処より、且は甚タ御急キノ処より、弘前へ御達シノ間もなく大道寺様・山中様御相談の上木村様ヲ平内より御引上ケ箱館詰メ被仰付候由ニ御座候」（「家内年表」十月十七日条）

※「家内年表」は、青森市の伊東善五郎家（滝屋）文書のうち嘉永六年九月から明治四年七月までの日記である。『青森市史七』

（資料編一）に収められており、「弘前大学国史研究」第五一号に大川哲夫氏の解説がある。

かくて、木村李之助隊は十九日に箱館、二十一日には、千代ヶ台の弘前藩陣屋に滞陣することになる。同二十一日には、総督府より

幕府脱艦何地へ碇泊するも計り難きを以て海岸防禦を嚴重にすべきの令達があった。同二十五日、松前福山藩重臣より加勢依頼があり、更に清水谷公考が難を避けて青森に来航、従うは箱館府兵五十二人、松前福山藩兵百五十五人、大野藩兵八十人、備後福山藩兵四百人で青森市中は大混乱となった⁽¹⁾。

翌二十六日隣藩秋田藩に対して、幕府脱艦の弘前藩への侵入の節の応援派兵の程を依頼している。更に時期により箱館へ渡海の内命をうけて去る十八日に弘前に帰藩していた碇ヶ関口大隊長都谷森甚弥に隊兵五小隊と砲隊を率いさせて青森に赴かせている。同時に家老杉山上総を軍事総轄とし、用人西館平馬に軍機参与を命じ、青森口に於ける指揮権を与えている。翌二十七日、箱館府維持し難きを以て、箱館詰士猪股久吉千代ヶ台陣屋を自焼させ撤退、更には先に進発していた木村李之助隊及び松前福山・秋田藩兵隊約千人が青森に帰還している。この為、榎本軍が青森まで進撃してくるのではないかとの臆測も生まれ「市中一同一方心配混雑ニ相成候」（「家内年表」）の状況であった。

ところで、応援派兵した弘前藩の木村李之助率いる四小隊は峠下村及び七重村で榎本軍と交戦している。十月二十日鷲ノ木に到着した榎本軍は、まず朝廷及び清水谷府知事に蝦夷島下付の嘆願書を提出するため、兵一小隊と共に使者を箱館に派遣している。翌日全軍上陸を開始し、大鳥圭介率いる一隊が使者の後を追って箱館に向かい、別に土方歳三らの一隊が海岸を南東に進み、箱館の東に出る作戦をとっている。十月二十二日、峠下村に達した榎本軍に対して、

弘前藩兵らが夜襲を敢行しているが反撃され失敗に終わっており、同二十四日、七重・大野村方面でも利あらずして五稜郭に撤退している。弘前藩としては官軍の小勢に加えて援軍がのぞめず、更には清水谷府知事の青森への避難があり、撤退の止むなきに至ったのである。

因みに、この戦いに於ける弘前藩の戦死者は四人である。

二十三日峠下村戦争の結果

討死 金寅太郎(27)、本田長之助(22)の二人

重傷三人(野沢常五郎・黒石源太郎・重田一学)

行方不明一人、

二十四日七重村戦争の結果

討死 石岡孫弥(22)、葛西文三郎(24)(但重傷を得
婦宮後相果)

重傷一人(岡一兵)

軽傷二人(田村理門、白戸常世)

なお、「家内年表」によると、

「打死は取交官軍二而十四五人ノ由ニ御座候へ共、手負ニ而当处へ
参り候分是へ取交三四十人も御座候由、是は蓮花寺へ仮病院相
立、夫へ引移ニ相成候」(十月二十六日条)とある。

緒戦は小規模の戦いではあったが、官軍側の装備の劣勢、戦闘の不慣れなどにより、弘前藩を含めて官軍側の死傷者は榎本軍に比べて多くを数えている。

十一日一日、清水谷府知事が府員及随者八十五人、府兵三十人を伴って浪岡に転陣、玄徳寺を本陣にすることになり、弘前藩では田

中秀蔵の一小隊を以て警衛にあたっている。『津軽承昭公伝』によれば、転陣の理由は府知事の立場としては、榎本軍の侵入に対してあくまで死守すべきであったがそれをせず、榎本軍の蝦夷地征圧を容易ならしめたこと、その責任を痛感するが故、軍機にたずさわるのは心苦しく、従って軍事の本営である青森を避けて、一時浪岡に謹慎することになったという。そして朝廷には待罪書を以てその措置を伺い出ている。しかし、この転陣は万一榎本軍が青森へ進撃してきた場合、要害の地でないため防戦しがたいということにあったようであり、清水谷府知事のこの転陣が、先の箱館よりの早期撤退ともからんで「清水谷様御始御附属ノ御役々共余り億病ノ者ト申唱ニ御座候」(「家内年表」十一月一日条)と酷評されている。

十一月四日、松前福山藩使が去る十月三十日付の藩主の書を持参、援兵を要請している。同七日にも再び三日付の家老よりの援兵を求める書が寄せられている。⁽²⁾しかしながら、これに対して弘前藩では、少々の応援を繰り出しても無益であるので、官軍の増援を待つて大挙進撃する旨を伝えている。

十一月四日、長州藩兵四百六十人が秋田の船川村から船で青森に到着、翌五日品川弥次郎率いる長州藩兵四百五十人、同七日、参謀山田市之亟率いる長州藩兵四百二十三人が弘前より陸路青森に赴き、滝谷善五郎宅を以て会議所としている。

同七日、青森港に旧幕脱艦回天・蟠竜が来航するという事件があり、安済丸船頭野村惣平が遠見役人として、船改めのため回天に至り質疑応答の後、奥羽列藩に対する陳情書を手渡されている。要約す

れば「我等既に身を容るるの地なし、去とて降伏して謝すべきの罪なし、ここに蝦夷地は皇国北門枢要の地なればこれが開拓の基を始め、永々外夷窺視之念を絶んとするにあり、よって奥羽列藩にあって日本北門のため厚く尽力あらんことを請う」というにであった。

このような旧幕脱艦の突如の示威的来航により、弘前藩としては西北海への来襲に備えてこの方面の警戒を嚴重にしている。すなわち、同九日、大番頭佐藤源太左衛門を大隊長として四小隊を鯉ヶ沢に出陣させ、前後して十三・小泊・深浦・金木等に警備隊を出すこと計十一小隊を数えている。因みに、この後旧幕脱艦は平館へ上陸し、同所の詰合役方と問答などし情勢の掌握に懸命であった。この不意の来航により、青森市中は大混乱となり、敵船の放発焼打ちに備えて、市民は家財等を近在近村へ運び疎開し、店に戸を閉め商売を中止するなど「其騒動申斗無御座候」（「家内年表」）という有様であった。

十一月十一日、青森に於いて官軍軍議の結果、江差に上陸を敢行して前進基地とし、更には去る五日に陥落した松前福山城を恢復せんという計画が練られた。それによると、弘前藩は青森口一帯を警備せよとのことであったが、この方面の守備は南部護送兵を以てこれにあて、都谷森甚弥隊を先導とするよう懇願し願ひ入れられるところとなった。しかしながらこの軍議は、江差が同十五日に榎本軍の占拠するところとなり、江差への進撃の件も中止となっている。同十二日、家老杉山上総より肥後細川家重臣へ書を送り、弘前藩は砲台とてなく守備おぼつかぬ為、旧幕脱艦の来襲に備えて応援兵の

派遣を請うというにであった。

更に同十四日、先に弘前に休兵していた木村奎之助が青森へ赴き、またこの日、用人神東太郎を東京の三卿に使し、北地事急なるを以て南部護送の出兵を免ぜられんことを請うている。この件について若干補説すると、十月三十日、南部父子及び賊魁二十人を東京へ護送の為、弘前藩より精兵二百人を出すよう総督府より令達があり、去る七日に馬廻り組頭兼用人山田十郎兵衛を隊長として、精兵二百人が弘前を発し、青森に滞在していた。しかるに、七日には前述のように旧幕脱艦の来航があった為、南部父子の護送ところではないと判断、清水谷府知事にも延引の伺いをたてる一方、同十三日には大浜へ転陣させている。更に神東太郎は盛岡の奥羽監察使藤川能登の許にも書を送って、南部護送の兵の派遣しがたき切迫の事情を照会している。これに対しては、同二十一日に至り、南部護送の件は能登の附属兵百人を以て弘前藩兵に代えるので、松前応援に専念されたしとして、この件は一応の落着をみている。

十一月十六日、浪岡に滞陣していた清水谷府知事が黒石へ転陣、感随寺を本陣としている。この転陣の理由は明らかではないが、「家内年表」には、「浪岡ニ而は在郷ノ義ニ付諸品高直ニ而御扱向も御不由ノ義黒石へ御移リニ相成候由ニ御座候」（十一月十八日条）と記されている。

同二十日、京都に於いて留守居役赤石礼次郎が并事御役所に対して次のようなことを建言している。すなわち、箱館戦争鎮圧まで降伏奥羽各藩の所置を延引すること、また寛大な処置をするならば、朝

延の威徳を感じ榎本軍に合流するものもありえないであらうというにあった。同二十一日、松前福山藩が去る五日の福山城の陥落後、江差への撤退防戦急を告げていることを報告すると共に、再び弘前藩に援兵を要請している。しかしながらこの日松前福山藩主松前志摩守及び家族来約六十人が、衆寡敵せず平館に避難するに至っており、次いで二十四日には、油川へ転陣することになり、更に二十六日に弘前に到り葉王院に滞陣することになる。

このことについて補説すると、松前福山藩では福山城陥落後、江差に撤退して防戦したのであったが、官軍の応援が望めず、ついに十一月十九日、藩主らは江差より北方九里の海岸熊石村より七十余石の小廻船長栄丸にて出航、二十二日平館に避難したもので、この後、二十三日に小船などによって福山藩兵六十余人が三馬屋へ来航、残りの二百余人は榎本軍に降伏するしかないという有様であった。但し、降伏人は榎本軍の方針により、各自の意にまかせられることとなり、その多くは内地送還となり、一部が蝦夷地に止まり帰農したという。

ところで、藩主松前志摩守は十二月三日（一説には十一月二十九日）突然逝去したため、同十二日に長勝寺に仮葬されることになる。

『新北海道史』には、持病の結核がすみ、咯血して二十五歳の多難な一生を終ったとあり、また「家内年表」にも「松前志摩守様当年二十四才ノ由、御急症ニ而今日弘前ニ而御病死被遊候」（十二月三日条）と病死したとあるが、自殺の噂も一部にあり、『福山五百年史』では「剣に伏して自ら果つ」とあり、自害説を主張してい

る(3)。

なお、明治三年に松前福山藩では、福山へ改葬したい旨長勝寺に申込んでいるが、長勝寺では寺法によって改葬ができないと主張、色々と曲折の末に、同年九月十二日に長勝寺を発棺し、同二十一日に青森を出航、十月九日に松前へ入港するに至っている。

十一月二十四日、弘前藩では東京出役をして藩兵の各所に出兵せる状況を報告すると共に、官軍の応援を請願している。

別紙出兵調によると、

大番頭 都谷森甚弥 六小隊

同 木村奎之助 同

右者青森表出張 右者清左衛門 五小隊

大番頭 戸田清左衛門 五小隊

右者平館より蟹田辺出張 右者平館より蟹田辺出張 四小隊

大番頭 山田十郎兵衛 四小隊

右者油川出張 右者油川出張 四小隊

銃隊頭 佐田大之丞 一小隊

右者清水谷殿御警衛 右者清水谷殿御警衛 四小隊

大番頭 佐藤源太左衛門 四小隊

右者鰺ヶ沢出張 右者鰺ヶ沢出張 四小隊

者頭 高杉左膳 一小隊

右者深浦出張 右者深浦出張 一小隊

者頭 佐藤只右衛門 一小隊

外ニ新組 一小隊

右者小泊出張

銃隊頭 湯本伝八郎

一小隊

新組

一小隊

右者十三出張

銃隊頭 工藤形次郎

一小隊

新組

一小隊

右者金木村出張

(『青森県史巻四』 五五五頁)

なお、青森表出張のうち、藤田留兵衛・対馬仙蔵二小隊は浅虫並びに久栗坂へ転陣繰込となっている。

十一月二十五日、弘前藩主津輕承昭は藩士に対し、時局の重大なるを告げ、「殊ニ上国応援之兵隊入込の場合武辺之儀決而他藩ニ相讓不申候様いたし度」と奮って軍事に従うべきことを告示するに至っている。翌二十六日には青森口参謀として山田市之亟・太田黒亥和太が発令され、のち黒田了介も補任されている。

十二月五日、新兵組成の事を藩内に布令し、社家修験等その子弟に至るまで、盛壮にして芸道の嗜みあるものを以て配兵不足を補おうとするにあった。同九日、東京出役をして速かに軍艦を発して箱館を回復せられんことを請うの願書を提出している。またこの日、小銃千挺の借用を軍務官に請い、翌日に貸与されている。同十日、藩内に犬狩を布令し、その皮を以て出兵兵士の防寒具にあてようとするにあった。翌十一日、青森参謀局より箱館府知事清水谷公考を青森口総督とする旨の布告があり、清水谷府知事は十四日に黒石よ

り青森へ転陣、常光寺を本営とすることになった。同十三日には十一月十九日付近衛両公より、「貴藩は確乎勤王之御趣意御貫き有之候様」との激励の書があった。なお、十一月十三日付で両公より同趣旨の書が、年があげた一月十八日にも届けられている。

このようにして明治元年末は、

「賊ニハ数艘ノ軍艦アルモ我ニ未ダ軍艦ナシ、弱小ノ和船ヲ以テ援兵ヲ送ラン乎、賊艦ニ粉碎セラレンノミ、兵アルモ送ルコト能ハズ」(『津輕承昭公伝』一六九ページ)

と評されるごとく、箱館進攻の為の軍備が整わず、従って松前福山藩よりの再三の援軍要請にも出兵できない状況にあった⁴⁾。また、逆に榎本軍の来襲の恐れなしともしないので、青森港は勿論、西北海沿岸の防備を嚴重にするということに終始せざるを得なかった。十一月二十八日付の参謀山田市之亟より各藩隊長あて訓令の中にも、青森には軍艦・砲台もなく防備不十分であるので、敵の上陸を待つて攻撃せよとの消極的な指示しか出せなかったのである。

「襲来之節ハ其持場海浜要衝之地ヲ占メ猥ニ発砲不致揚陸之節其機ヲあやまず防戦肝要の事」(『箱館海戦史話』)

注(1)「誠ニ俄ノ義ニ付市中宿手配旁大混雑仕候、右ニ付市中ノ大騒動申斗無御座、未聞ノ大変事ニ御座候」(『家内年表』十月二十五日条)

(2)「家内年表」によれば、十一月二日に青森に避難していた松前福山藩兵百五十人が福山城下危うしとみて、たまたま秋田からきていた蒸気船に便乗して福山へ帰藩している。

(3)「十一月二十九日葉王院に入る、時方に冬、凄風樹に鳴り、飛雪溟濛たり、偶々往事を憶へば恍として夢の如し、覚えず悽然として涙下る、徳広は長嘆一声、剣に伏して自ら果つ」(『福山五百年史』)

(4)觀戦外人の手記であるジョン・ウキル日記の三月下旬頃の記事に青森の状況が左の如く記されている。

「青森にて予等の目に映じたるは、至る所一様に日本刀を帯したる軍人の函館征伐の爲召集されて居りたる事なり。されど未だ天皇の艦隊及運送船は青森に来て居らざりしかば、是等の兵も函館に行く事が出来ずに皆其船を待ちて居りたるなり」

(三)

年が明けて明治二年一月二日、弘前藩主自ら青森に於いて箱館進撃隊都谷森甚弥・木村奎之助兩大隊の操練を觀覽し、士氣の鼓舞に努めると共に進軍の期至らば、藩主自ら藩兵を督して渡航進撃せんとする覚悟であるとし、その滞在も長引くことになった。しかしながら、進航の日時も期しがたい等により、同十七日青森を発し翌日帰城している。更に二月二十五日にも官軍の軍艦の来着近しとして藩主は青森へ出陣して、弘前藩兵渡航の差図にあたらんとする意欲をみせている。

一月十一日、東京に於いて用人神東太郎が討賊軍艦を青森に向けしめ、その先鋒を弘前藩に仰付けられたき旨の請願を朝廷に出して

いる。同二十六日、側役戸沢八十吉・近習小姓近藤栄三郎を使者として、熊本藩援兵の溺死者を弔慰している。すなわち、前述の杉山上総より細川家への応援依頼により、細川家では一月二日に援兵四百余人を品川より出帆させたのであったが、房州灘で暴風雨に遭遇し、鬼ヶ崎で破船、二百八人が溺死という海難事故にあっている。この間のことについて「家内年表」には次のように記されている。

「昨年より松前地麥逆徒横行ノ処より細川様ニ而蒸氣船へ御加勢御人数四百人斗乗組當春正月二日東京御発シニ而當国へ御差下シノ処、右蒸氣船途中ニ而破損御人数も百八十人斗海死ニ相候由」(四月二日条)

二月二十三日、青森に屯集する諸藩兵の人数調べを参謀會議所に提出しており、これによって当時の官軍の総兵力を把握でき、また、この時点では弘前藩兵が過半近くを占めている。

青森駐在 山口藩兵七百七十六人

津藩兵百八十人

久留米藩兵二百五十人

徳山藩兵二百五十五人

松前福山藩兵五百五十二人

野辺地駐在 岡山藩兵五百人

油川及新城駐在 備後福山藩兵六百二十一人

奥内村駐在 大野藩兵百六十六人

青森・油川・蟹田・浅虫・久栗坂・三厩・平館・瀬戸子・奥内

村等駐在せる弘前藩兵は二千八百八十六人

小湊駐在 黒石藩兵 百六十人

総員 六千三百四十六人

因みに、三月十一日には鹿児島藩兵百五十人、水戸藩兵二百三十人、其他各藩の補充兵合計四百人が来着している（『津輕承昭伝』一八七ページ）

なお、「明治日記」の明治二丁末年四月賊徒御誅罰のため青森江滞留の官軍勢力の列記も前述の人数調べとほとんど同じであるが、各藩兵の合計を六千三百四十三人とし、他に郷夫三千人余、水主三百人を加えて総人数万四千三人と記している。

三月十六日、旧幕脱艦蟠竜が油川沖にあらわれ、漁船の者に青森に淀泊せる軍艦の数を尋ねるなど官軍の動静を探索しつつあった。

「家内年表」にも、

「是は一両日中東京よりノ軍艦当処へ入津ノ風聞箱館へ相聞得、様子窺ノ為参り候義ニ可有之」（三月十六日条）とある。

なお、榎本軍・官軍共に情報の確保に懸命で、多くのスパイが放たれ、相互の状況は知悉されており、青森市中に於いても、

「問者ノ御吟味御敵重ニ而御不審ヲ蒙ル者色々ニ御座候」（「家内年表」正月十六日条）と相当神経を使っていたようであり、また、参謀山田市之丞より各藩隊長への訓令の中にも

「敵之間諜等可立入も難計ニ付各持場ニ於テ上下貴賤ニ係ハラズ敵重取調方可有之候事」とある。

弘前藩に於ける間諜処罰の具体的例について触れてみよう。

明治二年一月十八日、青森に於いて榎本軍の間諜市太郎なるものが斬罪梟首に処せられており、その罪状によると官軍の状況を探ぐ

るばかりでなく、後方の攪乱をも企てたとされている。

「於松前兇賊に金子をもらい間諜之為ひそかに当地へ渡海いたし夫より南部地へ入込み種々妄言を以て人心を感じ其罪不輕依之斬罪梟首せしむるもの也」（『青森市沿革史③』）また、「家内年表」にもこのことに触れている。

「越後ノ市太郎ト申者当前浜ニ而打首ニ相成候、右は箱館賊徒より金子ヲ貰ひ南部へ渡り夫より当処へ相越問者ニ相成候而色々ノ事申唱人心ヲ惑シ候旨、御召捕ノ上白状仕候由ニ付、打首被仰付候由ニ候」（正月十六日条）

なお、官軍の蝦夷地上陸直後のことであるが、「弘前藩箱館戦争屈書類写」にある笹権六郎隊の当麻武左衛門の覚にも、四月九日乙部に上陸後、同十一日進撃の途中で榎本軍の間者とおぼしき三人を捕縛し、詮議の結果、問者と認め二人を斬首にしていることがあげられよう。

一方、榎本軍も官軍方のスパイの取締りを行なっており、次のような高札を建てている。

覚

敵と通合候もの又は敵入廻しも捕押候ハ、褒美として金子五拾両遣候間精々探索可遂候

己二月

市中取締方

（『箱館海戦史話』）

しかしながら、スパイの取締りは双方共に至難なことであり、両者の動向は互に熟知していたといわねばならない。

三月二十六日、箱館征討官艦が続々と青森に集結することになる。

すなわち、軍艦丁卯・甲鉄・春日・陽春の四艘と軍送船飛竜・晨風の二艘計六艘であるが、これらは同九日に品川沖を出帆し青森に來航したものである。また、翌二十七日にも運送船豊安及び借上のプロイセン汽船も入港するに至っており、これらの艦船の乗組員は約七百名近くを数えている。⁽¹⁾こうして、後に來航せる軍艦朝陽・延年をあわせると官軍の軍艦は六艘となり、その所属別をみると、朝廷（甲鉄・朝陽）、薩摩（春日）、長州（丁卯）、佐賀（延年）、秋田（陽春）と諸藩の軍艦を召集して、ようやく遠征艦隊を編成できたのであった。

なお、これら官軍の遠征艦隊の北上はすでに榎本軍のキャッチするところとなり、宮古灣に於いて両者の海戦に発展している。

遠征艦隊は三月十九日宮古灣に到着するが、これに対し同二十五日、榎本軍は回天等三艘を以て奇襲をかけたが失敗している。

すなわち、昨年十一月に榎本軍は江差攻撃の際に、風浪の為旗艦開陽丸を擱坐させるといふ痛手を負っていたため、榎本艦隊の勢力が低下しており、「開陽丸は脱走艦中最も堅牢なものであったが、災厄に罹り士氣も亦沮喪した」（『函館市誌』）という状況にあった。また、榎本方の小杉雅之進や大島圭介もそれぞれ、「実ニ皇國無二ノ戦艦ナリシニ不幸ニシテ此ノ如キニ至ル、衆人暗夜ニ燈ヲ失ヒシニ等シ可惜」（『麦叢録』函館市立図書館蔵）

「全島の海陸軍之を聞き一駭一歎、胆を破り肝を寒し、切齒扼腕涙を墮すばかりなり」（『新人物往来社刊『幕末実戦史』所収による）と嘆く程、開陽丸の存在は榎本艦隊の中心であった。そこで、榎本軍は一時も早く機先を制する為、宮古灣を急襲して、特に遠征艦隊の最新鋭艦である甲鉄を捕獲しようという実に大胆な計画をたて、回天・蟠竜・高雄（秋田藩の軍艦で昨年十月二十八日に箱館で榎本軍に捕獲されたもので、榎本軍はこれを第二回天と命名）の三艦がこの計画に参加、三月二十日箱館を出帆したが、蟠竜・高雄の二艦は故障を起こした為、結局回天だけが単独で官軍の甲鉄艦を急襲、利あらずして艦長甲賀源吾以下十六人戦死、負傷者も三十人余を出している。「家内年表」には官軍方も二十余人負傷、四、五人の戦死者を出したという（三月二十六日条）。これら負傷者は被害の大きかった運送船戊辰丸で横浜の病院に収容することになる。

なお、高雄は官軍に追撃されて南部領羅賀港に乗り上げ、乗務員は上陸して普代村に潜伏したが、その将古川節蔵以下九十五人が、野田代官所を通じて降伏謝罪を申し入れており、後四月八日に東京に護送されることになる。

因みに、盛岡藩は高雄乗組員の上陸について、海軍参謀より「其余行衛相知不申ニ付、於其藩早々可被致探索」と命ぜられ、「此上如何様之事変モ難計当節銃器上納申ニ付、迅速之御用尽力之程別而心痛罷在候」と盛岡藩側の心配も大変なものであった（『岩手県史 卷六』）。

なお、回天と蟠竜は三月二十六日に箱館へ帰港することになる。

四月一日、熊本藩細川家からの応援兵百十五人が弘前へ來着し、同十六日に青森へ転陣している。「家内年表」によると、細川家は弘前藩主の実家でもあるので、この応援は「天朝江ノ御出兵ニ無之、当御国ヘ斗ノ御加勢ニ御座候」(四月二日条)であると強調している。同四日、箱館進攻の艦船も揃ったので、参謀局より先発隊の発表があった。それによると長州三百人・津輕三百人・福山三百人・松前四百人・大野百人・徳山百人、合計千五百人の陣容であった。上陸攻口を松前口に六百人、厚沢辺口に五百人、輜重要護兼熊石辺探索廻りに二百人、その他予備兵二百人としており、弘前藩ではこれら三方面に百人ずつを充てている。同五日に乗船完了するはずであったが、天候不良の為翌六日に延引している。総督より四月四日附を以て各藩隊長に対して左の訓令があった。

「今般賊徒追討ニ付テハ皇威ノ隆替敵軍ノ盛衰一々初戦ノ勝敗ニ関セリ諸隊長自ラ勵マレ宜シク之ヲ勉ムヘキ事」

(『青森県史卷四』六〇八ページ)

六日、午前十一時祝砲を發して進航した艦船は、軍艦甲鉄・春日・丁卯・陽春、運送船飛竜・大坂・豊安・雇米船ヤンシウの八艘で、参謀山田市之亟以下千五百人の先進隊が威風堂々の渡海であった。その後二陣・三陣と運送船のピストン輸送によって派兵及び物資運搬にあたり、「家内年表」によっても左のように列記できる。

十一日に帰港したヤンシウ船が、備前(野辺地に旧冬より滞在していた藩兵で九、十日に約五百人が青森に到着)・伊賀・筑後・越前大野等の人数約九百人を運搬している。また、十三日には、豊安・

飛竜が軍事物資を積込んで再び出航している。十五日には、ヤンシウ船・雇英船アルヒョン船で残軍兵を投入し、十六日には、飛竜並びに大坂が更に残軍兵を乗せ、これには参謀の太田黒玄和太も乗船している等があげられよう。

なお、官軍の艦隊が一齐に出航した六日に箱館府裁判所から箱館町役人宛の達書³⁾を外国船に託して送り、戦争に先立って箱館市民の疎開を促がし、戦火が収まりしだいに帰還させるよう要望している。また、「家内年表」には官軍の一斉進撃により、箱館に居留せし外国人は「箱館表鎮定迄引払候様天朝より御達ニ相成候」とあり、同八、九日両日に英・仏船にて続々と青森に避難してきている。

弘前藩主承昭は出陣の前日の五日に、大隊長木村奎之助・都谷森甚弥及び隊兵に対して親書の軍令状を授けている。

両隊長へ軍令状

「此度其方令渡海候儀は偏奉対天朝実効相立国威興張は肝要の目的に付、一際奮勵可致指揮候、依而殺生与奪之權を授与し、軍軍務の大小宜令專断もの也」

隊兵へ軍令状

「此度渡海令進軍候儀は、我等奉対天朝実効相立候肝要之目的に而、極て大功之戦に候条仍て賞罰之權を隊長に授け、殺生与奪共に其独断に任ず、此旨何れも屹度相心得一際可令奮勵候、若聊も後れケ間敷挙動有之に於て、縦令隊長其罪を恕し候共、

於我等決而許すべからず候也」(『津輕承昭公伝』一九三ページ)

弘前藩の渡海の様子は、六日に一番手隊長都谷森甚弥隊四小隊、二番手隊長木村奎之助隊二小隊が、ヤンシウ船に分乗して先発し、続いて同十五日、都谷森・木村両隊長に率いられた都谷森隊四小隊と砲兵一隊但し大砲三門、木村隊四小隊と砲兵一隊但し大砲四門、同十八日木村隊二小隊となっている。隊長以下隊兵は計九百二十七人、附属の従者・夫卒は千二百二十五人にのぼっている。更に各藩兵に附随として、弘前藩から出した夫卒二千五百七十四人を合わせる

と四千六百二十六人を数えることになる。

さて、四月六日青森を進航した艦隊は途中「風雨激濤不得止」平館に停泊することとなり、八日同所を発して、翌九日乙部村に上陸南下して江差を占拠、同十七日には松前福山城を奪還するに至っている。

同十日には佐賀鍋島藩の延年艦が、続いて同十五日に軍艦朝陽が青森に入港し、その日のうちに松前へ進航している。朝陽は同二日に品川を出帆してきたもので、艦長は野辺地戦争の際に野辺地港を砲撃した中牟田倉之助であった。

同二十三日、家老山中兵部を旗本統轄とし、山田十郎兵衛・戸田清左衛門・棟方角馬を軍監とし、弘前から漸次出陣した近習隊・その他の各隊及び青森口に駐在する各隊を合一して旗本隊を組織している。その数七百八十人、これに附随の従者・夫卒九百二十七人を加えて合計千七百七人である。また、当時西海岸に滞陣する警備隊は六百九十四人で、これに附随する従者・夫卒は五百四十八人、合

計千二百四十二人であった。なお、榎本軍の敗残兵が漁船等で潜行乱入したり、あるいは避難民が来航する場合もあるので、特に深浦・小泊には斥候を派遣して警戒を強めている。

同二十七日、江差・松前福山城を征圧の後、箱館への総攻撃を目前にして、いよいよ清水谷総督自身が松前・江差へ渡航することになる。雇米艦ヤンシウに乗船し、翌二十八日江差に上陸することになるが、これを警備する弘前藩兵は軍事総轄杉山上総以下隊兵八十九人、従者・夫卒八十七人の計百七十六人であった。

なお、箱館戦争に要した各藩兵及び弘前藩兵の総数を『津輕承昭公伝』(二〇〇ページ)は次のようにまとめている。⁽⁴⁾

航 渡		人 藩 本 航 渡	
鹿 児 島 藩 兵	二六三	函館地進撃兵	九二七
山 口 藩 兵	六九四	總督隨行役員兵員	八九
水 戸 藩 兵	二二六	通 計	一、〇一六
津 藩 兵	一六五		
岡 山 藩 兵	四八九		
本藩動員 總 計		人	
二、四九〇		東海駐在役員兵員	七八〇
		西北海駐在役員兵員	六九四
		通 計	一、四七四
		同上從者夫卒	九二七
		同上從者夫卒	五四八
		同上從者夫卒	一、四七五
		五二六一	
		合計一、七〇七	
		合計一、二四二	
		二、九四九	
		七、七五一	
		合計二、〇五二	
		合計一七六	
		合計二、五七四	
		四、八〇二	

各藩兵 總計	駐在 藩地	各 兵 藩					
		久留米藩兵	福山藩兵(備後)	徳山藩兵	大野藩兵	福山(松前)藩兵	熊本藩兵
總計	函館府員及各藩兵 三〇一	二五〇	六〇九	二五二	一六二	五三一	一一八
		三六〇	一〇一	三八	三八	一三八	一三八
本藩各藩 總合計	六六五一	五二九九	一一九五〇				

江差を回復したあと、官軍は兵力を松前福山城奪回と木古内口に向け、これに加えて二股口に至る鶴山道の三方面より進撃し、これに続々と増援部隊を振り分け、次第に榎本軍を後退させてゆくことになる。松前口は十七日に福山を回復した後、艦隊の援護射撃により木古内まで進出することになり、また、木古内間道方面も途中の抵抗もなく木古内に到達、松前口の軍と合流することによって榎本軍を撃破し、次いで大島圭介指揮する榎本軍と矢不來の激戦が展開されることとなる。

四月二十九日、官軍は矢不來へ総攻撃をかけることになり、弘前藩では山手正面に石山真太郎隊・笹権六郎隊を、右旗手に中山覚蔵隊・平沢定之助隊、後距隊として小山内織部隊・高杉左膳隊を配置

している。矢不來の戦いの前日に参謀の太田黒亥和太は木村隊長に對し左のように叱咤激励している。

「貴藩ノ兵渡航已來、未ダ各所ニ奮戦尽力スルアルヲ聞カズ、随テ又死傷多カラズ、抑天朝ニ對シ何ノ功ヲ以テ奏セントスルヤ」(『津輕承昭公伝』二〇二ページ)

かくて、木村奎之助指揮のもとに、まず海手より進発し、山手がこれに続き、他藩兵に先じて弘前藩が武功をあげ、敵を有川まで追撃している。従つてこの矢不來戦争をして、

「函館ノ役ニ於テ前後此功ニ比スベキノ功ナク、参謀ニ於テ当日ノ戦、弘前藩一等ノ功ヲ奏シタリト賞シ」(『津輕承昭公伝』二〇三ページ)と評される程であった。

なお、この矢不來の戦いでは大島圭介らが頑強に抵抗し、容易に抜くことができなかったが、海軍が側面から援護射撃をすることで退却させることができた。この敗戦により、二股口の榎本軍も背後より狭撃される形勢となり、撤退せざるをえなくなっている。

矢不來の戦いで、弘前藩では三人の戦死者を出している。すなわち、藤田虎之助²⁸、神勇蔵²⁹、島村亀吉³⁰の三人で、負傷者も二十八人に達し、このうち木村昇³¹、伊藤銀吾³²の両名は重傷を負つて帰藩後に落命している。

なお、この戦いに於ける負傷兵は飛竜で青森へ送還されており、この中には右腕に砲弾を受けた弘前藩の隊長木村奎之助自身も含まれている。これら負傷者に対しては、五月五日、弘前藩主及び黒石藩主が直々に見舞っている。

さて、矢不來の戦いの勝敗が決定的な影響を与えた二股口の戦況であるが、鶴山道を進撃した官軍は二股口で頑強な抵抗を受けて、二十三日から二十五日にかけての激戦にもかかわらず、これを撃破することができないでいた。この間の死闘の有様を『麦叢録』は次のように記している。

「廿三日ヨリ廿五日朝迄ノ連戦ニテ大隊有余ノ兵、各千発ニ近キ発砲故ニ銃暖ヲ生シ持能ハズ由之各桶ヘ水ヲ貯ヘ置三五発ニシテ筒ヲ冷シ代ルニ彈ヲ籠」

この二股口の役で、弘前藩では負傷者十名のうち、重傷を負った白取直之進が帰藩後に落命しており、また、軍夫であつた佐藤要之助は戦死を遂げている。

五月二日、松前福山藩では弘前藩に謝礼使を送り、同八日、福山藩主松前勝千代以下が、本領松前恢復につきヤンシウ船にて帰藩することになる。なお、五月上旬の形勢は海陸共に榎本軍を封鎖包囲するところとなり、陸軍は赤川・七重浜で両軍対峙し、互に夜襲を敢行するも膠着状態となり、海軍にあつても榎本艦隊はただ箱館港内を防禦するのみであつた。

五月十一日、清水谷総督は江差より木古内を経て有川に転進し、ここに司令部を置き諸軍を直接指揮することになる。また、この日を期して箱館争奪をめぐり、海陸夾撃の大戦闘が展開されることになる。この戦いに於ても弘前藩は第一等の戦功をあげたといわれる。

弘前藩の平沢定之助・田井市之亟の二小隊、軍監小山内雅楽、参軍永野邦助は富川より飛竜に乗船、箱館山背泊へ進攻して弁天台を

攻撃し、また、浜手本道口に笹権六郎・石山真太郎の二小隊、参軍芹川甚次郎・斎藤次郎作が、桔梗野口に高杉左膳・小山内織部の二小隊、参軍吉崎和作・田中小源太が、亀田口に対馬官左衛門・喜多村弥平治の二小隊が、さらに藤山村に神豊三郎の白砲一隊を配し攻撃したものである。本道口は奮戦して台場を略取し、桔梗野口・亀田口は敵が高地にあり、弘前藩兵が泡地に在ったため戦況は不利であつたが、肉薄して三個の台場を略取している。しかし、この戦いで弘前藩兵の戦傷者も多く、弁天台攻撃隊に負傷者六人、うち一人は後死亡、浜手口進撃隊は負傷者六人、桔梗野口進撃隊には小隊司令官高杉左膳他七人戦死、負傷者十二人、亀田口進撃隊は戦死一人、負傷者五人にのぼっている。この時の戦死者を諸資料によつて差異があるものの、比較検討することによつて筆者は次のように考える。

桔梗野口に於ける戦死者は、高杉左膳・坂本友弥・高杉権六郎・若林栄八・斎藤東八・諏訪久吉・佐藤純吉・中田勝之亟の八人、亀田口の戦死者は三浦銀弥、弁天台攻撃隊の負傷者が後一人死亡というのは工藤末吉のこと、彼は弁天台攻撃が結局失敗に終り、この砲台を孤立無援にするために軍を転じた一本木の戦いに参加、この戦いで重傷を負い帰藩後落命したものである。なお、桔梗野口に於いて重傷を負い帰藩後に落命した者に青木惣次郎、須藤万之助の二人があげられよう。

この箱館市街戦で榎本軍はわずかに五稜郭・千代ヶ台・弁天台を保持するのみとなつた。箱館攻略の模様を「家内年表」によつてみると、十一・十二の両日にわたる戦いで、榎本軍は敗退し、わず

かに五稜郭と弁天の台場を死守するのみとあり、台場には三百人余の榎本軍が防戦にあたり、官軍の軍艦による沖合からの艦砲射撃によって、台場近辺の町家三百余軒が焼失したと記されている。ところで箱館占領の際の悲劇的なことは、高竜寺内分院を襲った津軽・松前藩兵の一部が病院内に乱入して傷病者十余人を殺害し、あまつさえ放火するという事件である。松前藩・津軽藩としては旧幕軍に多大の怨恨があつたからだという（『新北海道史』）。

とまれ、先の矢不來の殊功、また、今回の戦役の功によって「総督始メ参謀監軍等、漸ク本藩ニ重キヲ置クニ至リ（中略）接遇以前ト異ナルニ至リ大ニ面目ヲ施シタリキ」（『津軽承昭公伝』）と実績を残す為の犠牲もそれなりに大きかつたといわねばならない。

次に海軍の戦況であるが、江差回復後は沿岸を南下する官軍を海上から援護射撃をしつつ、ついに四月二十四日甲鉄など五艦が箱館港内に侵入して、回天・蟠竜・千代田と交戦している。次いで同二十五日、二十六日と海戦を繰り返して、五月一日官軍は箱館山附近にて千代田を分捕り、次いで五月七日の海戦で回天・蟠竜共に被弾して運転不能となっている。二十四日からの海戦で、回天は八十発余被弾し、これが為蒸気機関を破損、浅洲に乗り上げて浮台場同様にして、砲を片舷にあつめるという有様であつた。そして五月十一日、最後の海戦が行なわれ、蟠竜の放った一弾で朝陽が撃沈させられているが、やがて市街が占領され、後方よりの砲撃をうけるなど、ついに回天は戦闘能力を失ない自焼し、乗組員は五稜郭に入り、蟠竜もまた自焼し、乗組員は弁天台に撤退し、ここに榎本艦隊は完全

に壊滅してしまふことになる。

なお、津軽半島にある三廐港は官軍艦隊の根拠地となり、箱館戦争前期に於いては海軍は三廐港より反復出動しており、同港は石炭の補給等の役割も担つたのである。すなわち、三廐港を仮根拠地として軍艦を待機させれば、わざわざ青森まで運送船を護衛する必要もなく、箱館港の榎本艦隊を津軽海峡の北入口で警戒すれば充分であつたからである。

しかし、戦況が次第に官軍側に有利となり、四月二十九日の矢不來の戦いの後は、艦船は三廐港まで退去しなくとも、富川沖に常在することが可能となつてゆく。

さて、五月十三日東京に於いて弘前藩では軍事多端・国力疲弊により、金十両の貸与を願い出、後に三万両の貸与をうけている。

同十五日、清水谷総督より弘前藩兵の茂辺地（矢不來の戦いのこと）に於ける奮戦に対しての慰労があつた。また、この日榎本軍の死守せる五稜郭・千代ヶ台・弁天台のうち、食料・弾薬が尽きた弁天台の二百四十人が降伏し、翌十六日に、千代ヶ台が占拠されるに至っている。千代ヶ台の戦いには先の箱館口・桔梗野口・亀田口より進撃した弘前藩三中隊も参加、この戦いで弘前藩は戦死者竹内範平⁽³⁾一人、負傷者五人を出している。

五月十八日、ついに榎本軍は降伏し、翌十九日清水谷総督は有川より箱館に転陣、弘前藩を代表して杉山上総が賀詞を呈している。

なお、豊安丸が負傷兵八十八人を乗せ青森に上陸、その際の戦況報告によると、十七日に弁天台の榎本軍百六十八人が降伏し、あ

とは五稜郭とモロラン（室蘭）の敵軍のみであると伝えている。そして二十日に入港した陽春が、五稜郭陥落による完全平定の旨を報じている。また、室蘭の沢太郎左衛門以下二百余名が降伏したのは六月十二日のことである。

注(1)「家内年表」によると、二十七日外国の蒸気船三艘が青森に入港しており、これは官軍の艦船七艘でも不十分であるため、外国の船を雇い入れ、荷物等の運送船にしようとしたものであった。このような艦船の集結によって「誠二前海ニは拾余艘ノ黒船碇泊未曾有ノ見事ニ御座候」という景観を呈し、弘前・黒石及びその近在の見物人が多数押ししかけたという。

なお、三月三十日には東京より大坂丸が青森に帰着している。これは去る二十日に参謀である長州の山田市之亟が一向に官軍の遠征艦隊が来援しないため、青森市中に滞陣せる諸藩兵が退屈し参謀局へ色々と談判に及ぶことなどにより、督促する為東京へ赴いたのであったが、途中にて遠征艦隊と行き違いとなり、この日に急廻引き返してきたものである。（「家内年表」三月二十日・同三十日条）

(2)『麦叢録』に「三月中旬ニ至リ兼テ内地へ出シ置シ間諜婦リテ曰、去ル十日官ノ軍艦（中略）総テ八雙品海出帆十七・八日ノ頃ニハ南部宮古港へ入津スベクトノ旨ナリ」とあり、極めて正確な情報を得ていたのであった。また、箱館に入港する外国船のもたらず情報も看過できない。

(3)今般其地暴乱之賊徒為御誅伐近々軍艦數艘御差向ケに相成、右は畢竟其地御救恤被為成度御聖旨に付、仮令御進撃に相成候とも成丈市中放火等不相成様、軍艦兵隊共に厚く御指揮被為在候得共、接戦の場合に至り発砲致候節自然流丸に中リ無罪の人民共殺傷に及び候儀も難計候間、暫立退不日平定に及び候はば、即刻其府へ帰住可致候、右之通致布告候間箱館町役人共此旨を体し、篤と人民共に申諭し不洩様触知らすべき者也

己四月

於青森 箱館府裁判所
（『函館市誌』）

(4)五月十五日に朝廷へ報告した員数と大体に於いて差異はないが、なお詳細にわたる個所もあるので左に記載する。

明治二年五月十五日立ニ而御届之義東京へ申遣候実数調

去月六日ヨリ追々各藩人数青森ヨリ渡海人数調

一、薩州	二百六十三人、
外ニ弊藩ヨリ差出候夫方	二百四十九人、
一、長州	六百九十四人 同六百七十九人
一、水戸	二百二十六人 同百四十人
一、伊州	百六十五人 同六十九人
一、備前	四百八十九人 同三百九十一人
一、筑後	二百五十人 同百六十一人
一、福山	六百九人 同二百六十一人

一、徳山 二百五十二人 同百六十一人

一、大野 百六十二人 同五十三人

一、松前 五百三十一人 同三百七十八人

各藩人員 合三千六百三十五人

弊藩ヨリ差出候夫方

×二千五百三十四人

右之通御座候、此段御届申上候、以上

各藩人数之内青森居残人数調左ニ

一、総督殿附 七人 一、箱館府 百二十五人

一、薩州 六人 一、肥後 百二十人

一、長州 八十二人 一、水戸 十三人

一、伊州 十五人 一、備前 十一人

一、福山 十二人 一、徳山 三人

一、大野 四人 一、松前 二十人

惣人数四百十九人

右之通御座候此段届申上候、以上、

(『青森県史巻四』六五六ページ)

(5)朝陽の火薬庫に命中した為、瞬時にして爆発・沈没したもので、看戦の英国艦等から小艇を出して救助に努めたが被害は大きく、死者五十四人(『北海道史要』)といい、また、『麦叢録』には次のように記されている。

「此艦へ乗組シ官軍八十人許ナリシニ海中ニ溺死シ命ヲ助ル者僅ニ二十人ニ過ズト云」

(四)

降伏人の処置については、五月二十一日昼にアルヒョン艦にて弘前藩兵の護衛のもと降伏人六百十二人が、同夜には肥後細川藩兵の警備のもとに榎本釜次郎以下六人がヤンシウ艦で青森に護送されている。これら降伏人六百余人のうち四百人は蓮華寺などに⁽¹⁾、二百人余は大浜へ止宿させることになるが、六月九日にまず二百五十人余が弘前へ護送され、残りの人数は六月十一日に全員弘前に抑留されることになる。弘前では最勝院・薬王院・耕春院・貞教寺・貞昌寺にそれぞれ責任者を定めて分宿させている。

なお、榎本ら首脳部は五月二十三日青森を、同二十六日弘前表を出立、網籠に乗せられ陸路東京へ送られ、六月三十日に東京到着、辰ノ口糺問所の牢獄に投ぜられることとなる。残余の降伏人も箱館より直接東京に移送せられるもの、秋田藩に預けられるもの、また、箱館に拘引せられるもの等があった。⁽²⁾

七月二十一日、弘前藩に抑留された降伏人を、近日中に蒸気船にて東京へ護送するということになり、笹権六郎隊一小隊の警備のもとに青森に再び送られ、寺四カ所に止宿することになる。これらの取り扱いにまたまた青森では負担となり「何卒一日茂早く迎船参候様仕度事ニ御座候」(「家内年表」七月二十一日条)という本音を洩らしている。

なお、「家内年表」によると、九月一日にも箱館よりの降伏人二百人余が青森に護送され、それらは碇ヶ関及び野内に於いて追放処分となったと記されている。

ところで青森には更に、蒸気船で秋田藩へ直接護送され抑留されていた降伏人二百十八人が、九月十五・十六日の両日に秋田藩兵九十人余の警備のもとに弘前を経て護送されるに至り、併せて降伏人も相当数にのぼったと推察される。これら箱館降伏人の青森に抑留されている者に対し、弘前藩では九月十二日筒袖の衣服四百二十拾七枚を給し、更に同二十八日には綿入を四百三拾八人へ贈っている。

而して、十月二十二日に箱館から大坂丸並びに弘前藩の手船安済丸が入港、同二十四日に降伏人六百十八人余が大坂丸に乗り組み、更に安済丸にも分乗し、また、秋田藩の護送兵九十人及び弘前藩兵も乗り組んで、同二十五日には両船が箱館へ向け出航している。これら降伏人は「場所々々江分配開拓人数ニ可仰付風評も御座候」(「家内年表」十月二十二日条)と噂されているが、結局は箱館弁天砲台に移され、明治三年四月赦免となっている。

なお、清水谷府知事が青森へ避難してきた日(十月二十五日)から、丁度丸一年にして降伏人すべてが引き払ったことになり、「誠ニ同月同日ニ而丁度丸一年相懸リ、月日同じ候義不思議ノ事ト是又申唱ニ御座候」(「家内年表」十月二十二日条)と感慨深く記され、また、これで長期にわたる降伏人の世話から解放されて青森市中の安堵感も察するに余りある。

降伏人に対しては比較的寛大な処置がなされ、榎本釜次郎が明治五年三月に放免となっているのは、その頂点をなすものであるが、ただ、脱走兵の追捕は厳重で、捕虜・内通者などが斬首処刑されている事実がある。脱走兵取締りの一例として左の触書がある。

「残賊共村々立廻候哉の趣相聞以の外の事に候、以後右様のもの有之候はゞ村々申合召捕可□□出候、手あまり候はゞ討殺候共不苦候、右の趣相触候条末々に至迄不洩様可触置もの也

己六月

裁判所」(『北海道史要』)

ところで、降伏人のなかで特記すべきは、箱館戦争戦記として名高い『麦叢録』は著者小杉雅之進(江差奉行並)が弘前最勝院の幽窓で編纂し、『箱館戦争図絵』も元幕府の絵図方岩橋教章が拘囚中に描いたものであるということであろう(『新北海道史』『北海道史要』)。

こうして戦後に於いても、弘前藩は降伏人抑留の役割を担い、五ヶ月余に及ぶ監視を余儀なくされたのである。

次に戦後の状況であるが、五月二十日会議所より戦死者招魂祭に關する布告⁽³⁾があり、翌日大森浜に祭壇を設け、戦死者二百十八人の慰霊祭を行なっている。また、同二十三日の箱館の乱平定につき、青森にいた弘前並びに黒石両藩主はそれぞれ弘前・黒石へ凱旋することになる。翌二十四日、鰯ヶ沢へ滞陣し沿岸防備にあたっていた佐藤源太左衛門以下西海岸警備隊が弘前へ引き払っている。また、この日箱館の役に戦死した司令官高杉左膳以下諸士の家族へ、藩主より弔詞を伝え金品を与えている。また、箱館に於て、清水谷総督は総隊長杉山上総を召し、左のような戦役の功を賞している。

「昨年来、長々之在陣辺陲僻地山海超越辛苦曾ナラズ、殊ニ去月進軍後日夜奮戦激闘忽逐成功候段、全忠勇之至実不堪感佩候、

此旨速ニ可及奏聞候也」(『津輕承昭公伝』二〇九ページ)

さて、弘前藩兵の撤退の状況であるが、五月二十四日豊安丸で弘前藩兵五百四十人余と黒石藩兵百五十人余が箱館より帰陣、青森に上陸したのに続いて、同二十七日都谷森甚弥が七小隊を率い、翌二十八日小山内雅楽が四小隊を率いて、それぞれ弘前に凱旋、藩主より城内に於いて慰詞をうけている。

なお、監軍北川六左衛門が先発隊の二小隊・砲隊一隊及び総督警衛隊二小隊を率いて箱館に居残り、総督府守衛の任にあたっている。ところで各藩兵の撤退については、「家内年表」によると五月二十七日官軍の遠征艦隊が各藩兵を乗せて一斉に東京へ向け出航したとある(六月三日条)。

五月二十八日、朝廷に対し弘前藩は去春討庄以来本年四月に至るまでの軍事費の概算を報告しているが、その額四十九万四千九百七拾両となっている。六月一日、弘前藩応援の為陸路北上してきた肥後細川藩兵二小隊は、箱館地の平定の報に接し、秋田飛根駅より引き返すことになり、隊長の内藤平右衛門がその旨を弘前藩主に伝えている。

翌二日、弘前藩は勤王の功により左の如く永世一万石下賜されている。

「津輕少将

奥羽諸藩逆焰に靡き候折柄賊境に介在し勤王之義を知、秋田応援各所奮戦、藩堀之任を遂候段、叡感不斜、仍而為其賞、一萬石下賜候事、

六月

行政官

別紙

高一萬石

津輕少将

依戦功永世下賜候事

明治二年己巳六月

(『津輕承昭公伝』二一二ページ)

更に、九月十四日には箱館役の軍功賞典があり、弘前藩は三ヶ年間一萬石を下賜されることになる。

「津輕從四位承昭

戊辰之冬以来、大に官軍を屯し、金穀供給不少、続て己巳之夏蝦夷地ニ入各所攻撃箱館之賊巢を破り終始勉勵竟ニ成功ニ立至候段叡感不浅、仍為其賞高一萬石三ヶ年之間下賜候事

己巳九月

太政官

從四位藤原朝臣承昭

高一萬石

依軍功三年間下賜候事

明治二年己巳九月

(『津輕承昭公伝』二二八ページ)

六月四・八・九・十・十一日と、藩主承昭は戊辰以来軍事功勞者に酒肴を賜って慶応しており、十二月二十五日より二十九日までの

間に、藩士に賞録・賞金・賞品または慰勞品を支給している。⁽⁴⁾六月四日軍事總轄杉山上総が弘前に凱旋、藩主承昭は同八日に杉山上総を城中に召し饗応している。また、この日弘前藩では近衛兩公・醍醐參謀・細川家へ使者を派遣し、松前鎮定のことを告げ謝礼している。翌五日、清水谷總督は弘前藩に金品を贈り応援の勞を謝している。同六日、弘前城南宇和野に於て庄内征討並びに箱館地方に於ける戦死者の招魂祭を行なっている。また、八月二十日には、肥後細川家応援兵の航海中破船の爲の死亡者に対する招魂祭も弘前で行なっている。

六月七日より十二日にかけて、青森口に滞陣していた軍監山田十郎兵衛・戸田清左衛門・棟方角馬以下の隊兵が弘前に凱旋している。

八月二十九日、松前には鶴川官兵衛以下一中隊が居残り、山澄吉藏以下三十人は箱館から東京への降伏人の護送の任にあたり、九月九日にその任を全うしている。

次いで九月十五日、鶴川官兵衛は隊兵を率いて箱館より歸藩している。更に「家内年表」によると九月二十三日に弘前藩兵五十人余が紀州藩の船を雇って青森へ上陸しているという。

撤兵の最後は、十月二十五日降伏人の警備にあたっていた松前箱館詰の五十嵐所吉以下一小隊がその任を免ぜられて歸藩、これを以て弘前藩兵はすべて箱館より撤兵したことになる。

さて、両軍の戦死傷者の状況であるが、その数を詳かにすることは甚だ困難であるので、以下諸書を引用して概要を把握するにとどめる。『新北海道史』では諸資料を総合した結果として、官軍の戦

死者二百八十六人、負傷者四百八十四人とし、また、榎本軍の戦死者は森町靈鷲院名簿の三百六十九人を引用している。また、『函館市誌』には、榎本軍戦死者の遺骨は憚る所あって之を顧る者殆んどなかったが、俠客柳川熊吉が実行寺の住職と謀り、自ら収拾して之を谷地頭の高所に埋葬す、その人員七百九十六人なりという。後同志相謀り一片の目標を建て名づけて「碧血碑」というと書かれている。しかしながら、その後神山茂氏の調査では榎本軍戦死者は五百五十人になるという（「箱館戦争幕軍陣歿者氏名考」⁽⁵⁾）。

更に『北海道史要』には、江差旧家に蔵する「明治二巳四月十一より諸藩戦死者名前書」に各藩惣人数六十六人の名と、松前藩総計百十五人をあげているという。なお、江差招魂社の戦死者として長州三名・備後福山十三名・越前大野九名・函館在住隊五名・御親兵四名・士官大砲隊四名・薩州藩四名・伊州藩三名・弘前藩九名、計五十四名を記している。また、海軍では朝陽艦の死者を五十四人とし、榎本軍のそれは不明としている。

さて、弘前藩の戦死傷者数であるが、資料によってまちまちで、すべてを正確に網羅している文献は得がたいのであるが、それらを比較検討することによって、筆者は次のように考える。既に前記の各所で戦死者名をあげてきたが、藩士・軍夫の重傷後死亡せる者も含めると、総計二十五人にのぼると考えられる。二十四名の名前は既述したのであるが、あと一名は五月三日大川村で戦死した軍夫花田定吉⁽⁶⁾である。また、負傷者は約七十二名以上と考えられる。官軍の戦死傷者（『新北海道史』による）に占める弘前藩のそれは、

戦死者数で一割弱、負傷者数で一割五分となり、松前藩のそれは別格としても、それに次ぐ犠牲を払ったことになる。

なお、箱館戦争で死んだ官軍一六五柱の霊をまつたのにはじまる函館護国神社の境内にある官軍の墓は五十有余基あり、そのうち十八基が弘前藩戦死者の墓で、各藩中で一番多くを占めている。墓碑名と本文中の戦死者氏名と若干異なるのは次の三名であるが、いずれも同一人物であろう。すなわち、墓碑名にある植田村長之助・駒越村安之助・葛原村建吉は、それぞれ本文中の本田長之助・佐藤要之助・花田定吉に該当する。

なお、上磯町字中野通には、戊辰戦争戦死者の官修墳墓が六基あり、そのうち五基に弘前藩として、明治二年五月十一日に桔梗野口で戦死した中田勝之亟他九名の名前が二人ずつ並記されている。

次に「家内年表」等によって負傷者のことについて補説するならば、箱館戦争中及び戦後統々と負傷者が青森に運び込まれることになり、これらは青森市塩町の遊女屋など五軒及び寺などで療養させていたようである。⁽⁶⁾また、六月二十六日に長鯨が青森に入港し、負傷者五十人余を乗せていたのであるが、この船に右所で療養していた薩摩・長州藩等の負傷者、病人約二百人が乗船、翌二十七日に東京へ向けて出航することになり、これですべての負傷者が青森を引き払うことになったという。また弘前藩兵の負傷者約四十人余も、六月十四日に弘前へ転送されている。

なおまた、諸藩の負傷者で養生叶わず青森に於いて死亡したものは二十三人あり、その内訳は長州六人・薩摩三人・御親兵一人・水

戸二人・備後福山四人・備前二人・伊賀五人であるとされているので附記する。

注(1)四百人ほどが蓮華寺・蓮心寺・正覚寺に分散宿泊となったものと思われ、「蓮心寺賊名前」明治二己巳年五月二十二日には二百三十五人が、「蓮華寺賊名前」明治二己巳年五月二十七日には百四十五人の名が列記されている。

(2)なお、参考までに『新北海道史』によると、降伏人のうち東京へ移送されたもの以外は弘前藩に五百八十二人、秋田藩に二百人、松前藩に四百人があずけられ、ほかに箱館に千五百十二人、室蘭に百八十人が拘留され、病院入院中のものは赦免となったという。

(3)明二十一日於大森浜海陸軍戦死之者招魂祭被取行候ニ付各藩兵隊朝六字同所へ可被相揃候事

但大砲一門ニ付五発小銃十発之空発バトロン用意可有之候事

調練順序、松前・長州・徳山・福山・弘前・大野・伊州・筑後・備前・薩州・水戸・在住隊・親兵・黒石・肥後・伏見隊（『箱館戦争と大野藩』）

(4)庄内南部征討及松前出張戦功を賞せらる加禄賜金各有差として、後日追加もあったが、この時八百六十二人に授与せられており、その中でも功績顕著なるもの人名・処遇等については『津輕承昭公伝』に詳しい。

(5)「明治辰巳之役東軍戦没者過去帖」の中の「箱館之役戦死

者靈位」によると土方歳三以下五百三十八人の名前が列記されているが、神山氏はこれを底本にして調査したものである。

(6)『青森史沿革史③』によると、五月三日に青森大病院を常光寺に置き、その他博労町柿崎忠兵衛・塩町の遊廓は総借り上げとなり、負傷者病人を養生させている。

なお、柿崎忠兵衛は戦後に総督府参謀会議所より賞金を賜わっている。

津輕領青森博労町町人

柿崎忠兵衛

右昨年以來病院宿申付候処至極丁寧な心を附久々尽力致候段寄特之至に候依之為賞美金五百疋指遣し候事

(五)

箱館戦争時に於ける黒石藩・八戸藩の動向については他日に譲るが、要するに、黒石藩は本藩である弘前藩と行動を共にし、青森・平内口の沿岸防備にあたる一方では、渡航進撃して箱館攻撃に参加するなど軍事的にも積極的であった。すなわち、家老唐牛無四郎を隊長とする二小隊は弘前藩兵らと共に江差へ上陸するや各地に転戦、千代ヶ台の戦いでは負傷者二人を出している。また、一時的にせよ清水谷府知事一行が黒石に滞陣となるなど、糧食その他の手配などにも意を注いでいる。

また、八戸藩の場合は青森を中心に野辺地並びにその周辺は官軍

の集結地となり、八戸藩でも、軍艦の碇泊、往来官軍の糧食手配等に奔走することになるが、軍事的には箱館に出兵することもなく、沿岸の防備に努めたにとどまる。先に本家筋の盛岡藩が朝敵となり、謝罪降伏中であつたことも関連して、微妙な立場にあつた八戸藩としては、表立った動きはできなかったといえよう。

さて、維新戦争に際し、弘前藩を含めて奥羽の各藩は時代意識の成長に遅れていたし、また、情報の較差も大きかつたわけで、藩是の確定に逡巡せざるをえなかつた。特に、弘前藩にとっては奥羽越列藩同盟を脱退し、王事に勤むることになつたという寝返りの意識が「武門の面目」ともかわりあつて、顕著な功をたてることによつて官軍側の疑惑を解き、また、奥羽の各藩に対しても「武士の意地」を全うする必要があつた。しかしながら、奥羽戦争に於いては「彼是ヲ以テ大體ヲ通觀スルトキハ、士氣昂ラザルニアラザルモ、徒勞多クシテ実功少キノ評ヲ免レズ」(『津輕承昭公伝』)の実情であつた。しかるに奥羽戦争鎮定後、箱館戦争が勃発するや、弘前藩のこれにかける意気込みは勢い大なるものがあつた。弘前藩は安政二年に蝦夷地の警備を命ぜられて以來、多大の犠牲と出費を余儀なくされてはいるものの、北方警備の責務上榎本軍の蝦夷地占拠に對しては、他藩に先じてこれと武力衝突し奪回しなければならぬ立場にあつた。弘前藩は官軍の兵站基地となり、

「挙国財ヲ尽シテ之ニ供シ、一步モ他ニ譲ラザルノ覚悟ヲ為シ、藩地駐在自他官軍ノ糧食諸費ノ如キハ甘シテ之ヲ供給シ、又或ハ汽船ヲ購入シテ進撃ノ用ニ供セントシタリ」

「他日官軍大ニ到リ、軍資糧食ヲ要スルコトアルニ至ラバ、国力ヲ挙ゲテ其求ニ応ゼントスト」(『津輕承昭公伝』)

と藩をあげての決意があつたし、糧食並びに宿泊その他色々の調度等は、弘前藩に於てほとんど一切を賄つたといつても過言ではなく、箱館進撃の先鋒を弘前藩に命ぜられんことを請願し、軍事的にも実効を立てんとしていた。そして矢不來・桔梗野口等に於ける戦いに、多数の死傷者を出しながらも肉薄力戦して、参謀局よりも弘前藩が一等の功を奏したと賞讃されるに至っている。

しかしながら、實際弘前藩は諸藩兵の糧食の供給と宿泊その他の斡旋など官軍の接待に苦心し、また官軍の出撃、準備、沿岸の防備等に忙殺されることになったわけで、特に兵站基地となった青森市民の負担は実は大なるものがあり、迷惑至極のことであつた。

「誠ニ以頃日中奥羽同盟方一同謝罪ノ処より靜謐、諸方官軍も追々引払下民家業ニ有附候体ニ候処、又々俄ニ右様ノ異変(榎本軍の蝦夷地占拠のこと)ニ相成当惑此事ニ御座候」(「家内年表」十月二十五日条)

「何卒早々官軍御人数御引払静謐ニ相成様祈念ノ外無御座候」

(同書正月元日条)

かくて、莫大な糧食・薬品の供給、宿舍・寝具等の手配などに奔走し、『津輕承昭公伝』にも「当時ノ青森現状ヲ叙センニ」として、「寺院ハ勿論商家ヲ挙テ陣所ニ充ルモ、尚宿所ナク、糧食・寝具諸物ノ供給、雑訴ノ裁許、雑件ノ処分、其多事名状スベカラズ」とある。

もつとも、受け入れ体制も多人数ゆえに充分であるはずもなく、寒冷地に於ける諸藩兵の苦闘せる有様は左の「松田一作出兵控」にも推察できる。

「官軍兵多数ニ付寒中三人ニ蒲団一枚夜中長ノ寒中難儀実ニ難尽筆紙」(『箱館戦争と大野藩』)

更に、官軍進攻後も蝦夷地へ糧食の補給が続き、江差に於いて弘前藩家老杉山上総が官軍参謀山田市之亟に藩の事情を訴えた左の文中に弘前藩の苦境が示されている。

「於津輕ハ昨冬以來数千之兵隊を養ひ此度ハ既ニ一万に及其外夫卒とても四五千を越し耕作にも殆ど差支小国にして能も尽力いたし此上万一当秋飢饉等にも有之候ハ、何と可致や津輕は迎も国を立不能」(『箱館海戦史話』)

とまれ、維新戦争そのものが予想外に早く鎮定されてしまったことには、人民大衆の動向が大きな作用をもっていたとはいへ、弘前藩に代表されるように、錦の御旗という美名のもと、時勢の本流に流されながら、多大の犠牲があつたからであり、この早期的かつ決定的な新政府軍の勝利が、明治政権の行方に重大な意義を投ずることになったといえるであろう。また、箱館戦争を契機として蝦夷地開拓の必要性が認識されていくことにもなる。

維新戦争を通じて、弘前藩の貢献は多岐にわたり、その後の新政府と弘前藩の関係は好転するといへ、『白河以北、一山百文』と評されるとき、薩長を中心とする西南雄藩に対する東北の劣位が明確になったのも事実である。僻遠の地に位置する弘前藩は直接戦

火に蹂躪されることはなかったものの、各地に出征転戦し多くの犠牲を余儀なくされるが、それも結局は統一国家出現への胎動であったといえるであろう。

(青森県立岩木高等学校教諭)